

2023年度第18回石本賞選考結果報告

石本賞選考作業部会長
柏端達也

石本賞は、石本新氏のご遺族の寄付金をもとにした事業の一環として2006年度に創設されました。当該年度から遡り過去3年間に『科学哲学』に掲載され、掲載決定時において40歳未満の著者による論文か、または科学哲学関連分野での博士の学位取得後8年未満の著者による論文のなかから優秀作一篇を選び、著者の研究活動を支援・奨励することを目的としています。

これまでの受賞作は以下のとおりです（副題は略させていただきます）。

- | | | |
|------|--------|--|
| 第一回 | 青山 拓央 | 「時制的変化は定義可能か」 |
| 第二回 | 三平 正明 | 「フレーゲ：論理の普遍性とメタ体系的観点」 |
| 第三回 | 前田 高弘 | 「知覚経験の対象としての性質」 |
| 第四回 | 大塚 淳 | 「結局、機能とは何だったのか」 |
| 第五回 | 山田 圭一 | 「ウィトゲンシュタイン的文脈主義」 |
| 第六回 | 小草 泰 | 「知覚の志向説と選言説」 |
| 第七回 | 佐金 武 | 「現在主義と時間の非対称性」 |
| 第八回 | 大西 勇喜謙 | 「認識論的観点からの实在論論争」 |
| 第九回 | 秋葉 剛史 | 「Truthmaker原理はなぜ制限されるべきか」 |
| 第十回 | 細川 雄一郎 | 「反事実条件文推論の動態論理による形式化」 |
| 第十一回 | 北村 直彰 | 「存在論の方法としての Truthmaker 理論」 |
| 第十二回 | 榊原 英輔 | 「What Is Wrong with Interpretation Q?」 |
| 第十三回 | 鴻 浩介 | 「理由の内在于主義と外在主義」 |
| 第十四回 | 李 太喜 | 「選択可能性と「自由論のドグマ」」 |
| 第十五回 | 高谷 遼平 | 「主張内容を合成的に導く」 |
| 第十六回 | 石田 知子 | 「「遺伝情報」はメタファーか」 |
| 第十七回 | 飯川 遥 | 「規則のパラドックスに対する懐疑論的解決とは何だったのか」 |

今年度の受賞作は53巻2号に掲載された次の論文に決定いたしました。

伊藤遼「初期ラッセルの存在論における世界の十全な記述可能性」

本論文は、バートランド・ラッセルの初期の著作『数学の諸原理』における重要なテーマやアイデアを、著者独自の観点や問題意識から検討した論稿です。丁寧な分析と手堅い議論を通じて、明確かつ堅実な結論を導いている点が、高い評価を得ました。

論文における伊藤氏の主張の骨子は、ラッセルが『数学の諸原理』のなかで保持すべきであり、かつ実際保持しようとしていたのは、標準的な解釈において言われる「無制限変項の原理」ではなく、じつは「世界の十全な記述可能性」とでも呼ぶべき考えだったというものです。主張のこの骨子は（良い意味で）シンプルでありながら、今日多くの論者が受けいれている解釈と対立するため（もし伊藤氏の読みが正しいなら）啓発的でもあります。

「無制限変項の原理」とは、論理学における変項がすべての存在者を変域にもつ変項一種類のみだとする原理のことです。『プリンキピア・マテマティカ』へと至るラッセルの思索の展開は、その重要な原理を彼のタイプ理論といかに調和させるかという課題解決の営みでもあった、というのが標準的なラッセル解釈だと伊藤氏は指摘します。

伊藤氏は、そうした標準的解釈に抗う形で、無制限変項の原理が、初期のラッセルにとって一見するほど重要な動機づけを与えるものではなく、また理論内的に必要な不可欠なものでもないと主張します。

無制限変項の原理は、たとえば「存在の一義性」の擁護には役立ちません。存在の一義性のテーゼとは、中世の形而上学のあの「存在の一義性」のことですが、それは解釈者たちによってしばしばラッセルの無制限変項の原理の前提にあるものと示唆されてきました。しかし伊藤氏によれば、かりにラッセルがその種のテーゼを受けいれたいと考えていたとしても、無制限変項の原理はそのことに貢献しません。存在の一義性は、無制限変項の原理から帰結しないからです。無制限変項の原理を保持する外在的な——すなわち護りたい他の何かに向けての——理由はラッセルにはないだろうと伊藤氏は結論します。また伊藤氏は、無制限変項の原理がラッセルの理論にとって内在的にも必要不可欠なものではないと論じます。伊藤氏は、無制限変項の原理を前提としているとされる『数学の諸原理』の複数の箇所注目し、そこにおけるいずれの議論やアイデアにとっても無制限変項の原理が本質的でないことを示します。以上のような道筋の分析を、伊藤氏は、現代のラッセル研究の成果を巧みに援用しつつ構成していきます。

そして次に伊藤氏が指摘するのは、実際のところラッセルにとって重要であったのはむしろ「世界の十全な記述可能性」と呼ぶべきアイデアであったということです。伊藤氏によれば、そのアイデアは、ラッセルがブラッド

リーの観念論的な判断論を否定するにあたっての鍵となるという点において、それを保持する外在的理由をラッセルに与えます。さらにまた、項ではない存在（「真対象」）を認めるラッセルの理論は、世界の十全な記述可能性というそのアイデアのもとでこそ可能になるという点において、そのアイデアを擁護する内在的理由がラッセルにはあることとなります。

伊藤論文は初期ラッセルをめぐる専門的な考察を展開した論文ですが、読解論文にありうる“ラッセルと私”のような閉じた構図に陥ることなく、ラッセル研究の諸成果を包括的に踏まえて議論を組み立てている点が、評価されました。また、諸解釈の単なる整理にとどまることなく、独自の一貫した視点からラッセル哲学を捉えようとしている点も、高く評価されました。

選考の手順と経過を以下に素描します。8月初めの編集委員会において第一次選考を行ないました。そこでまず、

- 須田悠基「真理の多元主義は実質性を保てるか」
- 伊藤遼「初期ラッセルの存在論における世界の十全な記述可能性」
- 清水右郷「トランスサイエンス概念をつくりなおす」
- 小川亮「哲学の一般的方法としての「最良の説明への推論」」
- 森田紘平「くりこみ群におけるミニマルモデルに基づく局所的創発」

の5篇を、石本賞の授賞候補論文とすることが決まりました。

それを受けて、編集委員長を部会長とする選考作業部会を発足し、8月下旬から11月上旬にかけて、第二次選考と最終選考を行ないました。選考方法は昨年と同様です。すなわち、まず、各選考委員が第二次選考で上記5篇のなかから2篇ないし3篇を理由を添えて選び出し、次に、それらを相互に検討しつつ最終候補2篇を決め、決選投票を行なうというものです。

今年度は第二次選考段階で意見が比較的分散しましたが、最終候補として残ったのは伊藤論文と森田論文でした。持ち点配分方式による決選投票でも票の均衡が見られたため、さらにきめ細かな意見交換を行ない、慎重な協議を経て、最終的には全会一致で伊藤論文を本年度石本賞授賞作としました。

今回はとくに選考委員から「テーマやジャンルが非常に異なる論文を比較することの難しさ」が指摘されました。もっともな指摘ですが、裏を返せばそれは、授賞候補論文のいずれもがそれぞれに捨てがたい特長をもっていたということにほかなりません。

なお、2023年度の石本賞選考作業部会委員は、大塚淳、柏端達也（部会長）、齋藤浩文、原田雅樹、横山幹子の5名（五十音順）でした。